

優秀賞

ふたつの病 ふたつの言葉

京都府 松島 恵介

五十歳を目前にしていた数年前、私は突如癌と鬱病をほぼ同時に発症した。担当医は、「今すぐ仕事を全てやめて、半年間は何もせず休んで下さい。」ときっぱりと私に告げた。

ああ、失敗してしまった、と私は思った。自らの心身を労わず、過度に頑張り過ぎたつけど。これから半年、世界は大きく変わるだろう。その後ですんなり復帰など、到底できる訳はない。もはや、私の心は折れていた。

そんなことを縷々訴える私に、その老医師は、「病気を自力でやっつけよう、なんて頑張らないでね。あなたの場合は、『お隣さんとの付き合い』みたいな構えでいい。あ、それから、『折れた心』なんてのは、ほっといていいから。」と、すこし微笑みながら言った。

その言葉は、私には唐突なものとしてしか響かなかった。が、心身とも消耗しきっていた私は、それにすぎる以外の術はなかった。

その言葉が少しずつ心身になじみ始めたのは、それから何か月もした後のことであった。

よく考えてみれば、癌も鬱病も、自らの力で捻じ伏せられるようなしろものではない。

「お隣との付き合い」というのは、深く関わり過ぎず、でも無関心ではない、適当な共存の仕方なのだろう。完治が長引くであろう心身の病を抱えた私は、それらと「お隣さん」のように、うまく付き合い合っていくしかない。

また「折れた心」という言葉は、それを元通りにするような表現は見当たらない。「挫折」なら乗り越えられるし、「七転八起」という言葉もある。「折れた心」は、さしあたり、ほっておくしかない。むしろ「折れた」ことに囚われる事は、却って心を悪い方向へと導いてしまう。折れてはいても、私の心は以前と同じように、そこに「ある」のだ。そう考えると、随分と気が楽になった。

言葉は、それを受けとった者が自らのうちで熟成していくことを契機に、思わぬかたちで救いの手を差し伸べてくれる。そのことを、齢五十にして、私は初めて学んだのだった。